

3. 思考の芽ばえを尊重しましょう

質問にはうるさがらずに

幼児は、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あの人だあれ」「ここどこ」と質問を連発します。そしてこの質

問の答えによって、知識を身に付けていくのですから、もちろん、正しくいねいに答えてやると同時に、質問しやすいような雪囲気づくりをすることが大切です。

ところが、質問をうるさがると、だんだんしなくなり、知識の増加が止まります。忙しい時でも、明るく応答してやり、答えをもらう楽しさを、満喫させてやるのが大切です。

「なあに」「だれ」「どこ」という単純な質問から、やがて「どうして」「なぜ」というように、物事の原因や理由を追及する質問をするようになります。

それまで、単純に、別々のものと見ていた物事に対して、これに関係づけ、結び付けて考えるように成長したためです。幼児の思考能力は、こうなると著しく向上します。

しかし、この種の質問は、以前の質問と違って、大変に答えにくい

ものがあり、説明すればするほど、新しい疑問が出てきますので、往々にして親が受け切れなくなります。でも、決してでたらめに答えたり、はぐらかしたりすることなく、応答してやりたいものです。

解らない時には、「さあ、お母さんにも解らないわ。お父さんがお帰りになったら、一緒に聞いてみましょうね」とか、忙しい時には「またあとでね」とか、とにかく、まじめに応答する態度を示してほしい、と思います。

鳩は鳩、鶴は鶴と教える

たいていの人が、鳩でも鶴でも「鳥」と教え、金魚でも鯉でも「魚」と教えま

す。しかし、鳩は鳩、鶴は鶴と教えるべきだと思います。「鳥」という名の鳥は存在しません。「鳥」という言葉は、鳩や鶴が解った後にそれを総合する言葉として教えるべきです。そうでないと、「鳥」や「魚」という言葉は、正しく理解できないからです。

一般に幼児は、実物に即した具象的な言葉はそのまま容易に受入れることができますが、実在しない抽象的な言葉は、具体的な実物に結び付けられない限り、理解することが出来ません。例えば、「お母さ

ん」という言葉は、最初は、実在する自分の母親を表す言葉としてしか理解できません。「友子さんのお母さん」と言えば、「それはお母さんじゃあない。お母さんはこれ」と言って、自分の母親を指さします。

そういう幼児ですから、抽象的な「鳥」よりも、実在する「鳩」「鶴」の方が理解しやすいのです。

漢字も、やはり、「鳩」「鶴」というような字から教えると容易に覚えられます。これらの漢字は、二歳以後なら、どんな子でも必ず理解して読むようになります。学習の難易は、字画には関係ありません。

ㇿ ㇾ ㇽ

部首 鳥

長い尾のとりの形。隹は、短い尾の鳥を象った象形字。しかし部首としては、‘鳥も隹も同じく一般的な“とり”’。鳥は鳴く音で表す漢字が多い。

【鳩】 クークーと鳴く音を表した九と鳥との形声字。“クークーと鳴く鳥”つまり「はと」のこと。

【鶯鳥】 ガーガーと鳴く音を表した我と鳥との形声字で、「がちょう」のこと。

【鶻】 ケーン(絹のつくり部分)と鳥との形声字で、「ほととぎす」のこと。

【鷄】 コケッコウという鳴き声を表す奚と鳥との形声字で、「にわとり」のこと。

【鶴】 カッカッという鳴き声を表した雀と鳥との形声字で「つる」。「鶴首」は首を長くして待ち望むこと。

ㇿ ㇾ ㇽ

部首 鳥

【鶇】 ピーピーと鳴く音を表した卑と鳥との形声字で、「ひよどり」のこと。

【雅】 カアカアという鳴き声を表した^カ牙と^{とり}隹との形声字。“からす”。

からすは“反哺”といってエサを取ることができなくなった親鳥にエサを口移しに食べさせる孝鳥だと言われている。その親子の情愛が“正しく”“ゆかしい”ので、その意味に用いられるようになり、からすは「鴉」と書き分けるようになった。

【鳴】 鳥と口との会意字で、“鳥のなく”ことを表した字。転じて“なる”“ならず”という意味にも。

【雀】 “小さい^{とり}隹”つまり「すずめ」のこと。

絵本で、鳩や鶴の絵のところに、これらの漢字を書入れておけば、子供たちはすぐ覚えてしまいます。

「鳥」というような字は、鳩と鶴の共通点に気付いて、「鳩と鶴には同じところがあるね」と言うようになった時に、①それがトリという字であること、②トリとは、鳩や鶴のように、翼があり、羽毛があり、足が二本の動物の総称であること、などを教えます。

数は使って見せる

今述べたように、抽象的な言葉や文字というものは、幼児の思考力を超えているために理解しにくく、なかなか関心を持ちません。したがって、親の方から一方的に教えても、それに興味が持たないので、無駄な努力に終わります。数の場合もそうです。お菓子を配る時などを機会に教えるとよいでしょう。もっとも、数えるというよりも、使って見せることです。実際に使って見せていけば、だんだんと理解していきます。

“教える”ということは、いろいろな物の実体が解って、そのうち「これは同じ仲間のもの、これは別の仲間のもの」というように、分類したり、同類を集めたりすることが出来て、初めて出来ることですから、一

般に考えるほど易しいことではありません。

世界的な数学者であった故岡潔先生は、「数は急いで教える必要はない。それよりも、幼児の接する実在や、それを表す言葉を、はっきりと認識させることの方が先だ」と、おっしゃっていました。それが出来なくては、数が理解できるはずがないからでしょう。

幼児の理解は、具象的なものから、具象物を通じて抽象する能力が育ち、自然と抽象的な言葉や文字の理解へと進んでいくものです。説明して解るといえるものではありません。

“易から難へ”ということは教育の当然の手順です。ですから、易しい漢字を先に学習し、覚えにくいかなを後にするのは、その意味で当然のことと言えます。

しかし、それ以上に大切なことは「漢字を先に学ばせる」こと価値です。これはとても大切なことです。

かなを先に覚え、かな書きの本から読み始めた子供と、漢字を先に覚え、漢字かな混り文から読み始めた子供とでは、読書力の育ち方が全く違うからです。